日本経済新聞　2000年（平成12年）12月20日（

文　化

# 遠来の師 今なお追慕

◇ドイツ人教師、カルシュ博士の功績を松江に追って◇

若松秀俊

松江で日本人の教育に尽くした外国人と言えば、アイルランド人のラフカディオ・ハーンが余りにも有名だ。だが一九二五年から十四年間、旧制松江高校（現在の島根大学）でドイツ語を教えたフリッツ・カルシュ博士のことは歴史の谷間に埋もれている。

カルシュ博士は赤沢正道、高田富之の両氏ら政治家、レーダー開発の功労者である酒井勝郎氏、「長崎の鐘」で知られた医師の永井隆氏ら、後に各界のリーダーとなる人々の青年期に多大な影響を与えた点で、ある意味でハーン以上の業績を残したと言える。

## 出会いは全くの偶然

私にバイオサイバネティクス（生体システム工学）の研究で旧西独のエルランゲン＝ニュルンベルク大学に留学した経験があるとはいえ、哲学者のカルシュ博士との間に学問上の接点はない。

忘れられた外国人教師の足跡の発掘に魅せられたのは、全く偶然の出会いからだった。昨年九月、ドイツのカールスルーエで開かれたシステム工学の国際会議に参加した折、週末に助手、弟子とシュツットガルトへ出かけた。ホテルで朝食をとっていると、一人の老婦人が私たちの会話に耳をそばだて、にっこりとほほ笑んだ。日本語は全く話せないが、「かつて日本に住んでいて、日本語の響きが懐かしい」のだという。

このフリーデルンさんが、カルシュ博士の二女である。彼女は父が松江で教べんをとり、第二次世界大戦中は東京のドイツ大使館に勤め、終戦間際は軽井沢に疎開していたことなど、私たちに話してくださった。松江とハーンの関係くらいは知っていたから「カルシュ博士にも相当の足跡があるのではないか」と思い、帰国後、松江市役所に事実確認の電話を入れたのが、探求の日々の始まりだった。

## 心温まる師弟の交流

最初は期待に反し、何の手がかりもなかった。島根大学の図書館で博士の履歴書を発見して初めて、存在の事実を確認できた。そこで、フリーデルンさんの姉を探した。

いま生きている方々はみな九十歳前後の高齢だ。一様に「素晴らしい先生だった」と振り返り、「今の私があるのはカルシュ先生のおかげ」と涙を流しながら語る様に胸打たれた。何人かの人が書いた回想には必ず、カルシュ博士のエピソードが載っていた。私は長年、自然科学の研究に携わってきたが、調べ物をしながらの心温まるロマンは、初めて味わった。

例えば永井隆氏はカルシュ先生の温厚な人柄を慕い、ドイツ語と日本語それぞれの上達を目指して、週末の散策へ誘い出した。浜で見つけた石を指し、永井氏や酒井勝郎氏がドイツ語で「何ですか」と尋ねると「ビムスシュタイン」の答え。生徒たちはその意味がわからず、あれこれ食い下がると、先生は火山岩の成因から英語も交え、根気良く説き起こす。勘のいい生徒が「あっ、軽石だ」と気付くまでとことん、説明の手綱を緩めなかった。

私の手元には一九三二年、「文乙九期生」を相手にマルクス主義についての講義をするカルシュ博士の写真がある。著名な哲学者ニコライ・ハルトマンの門下生としてドイツ理想主義時代の理性的リアリズムを修め、シュタイナーに傾倒する行動派の人智学者でもあった博士は、学者としてマルクスの唯物論に反対する立場にあった。

しかも、話の聞き手は十八、九歳の日本の若者。だが、当時の世界を席けんしたマルクス主義についての情報をきちんと伝えようと、一心に打ち込んだ姿の記録である。

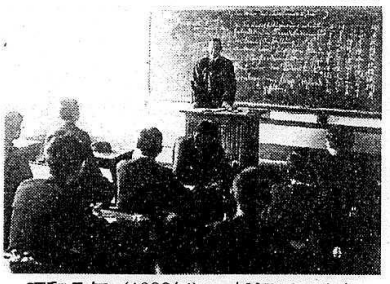
## 松江へのあこがれ

松江の住居が火災に遭遇した際、近隣の人々が消火に力を貸し、鎮火後は「鉛筆一本に至るまで盗まれなかった」との体験が、日本好きをいよいよ深めたらしい。一八九三年にブラゼビッツで生まれた博士は十八歳の時、ドレスデン国際博覧会で日本と出合い、ハーンの存在を知った。松江ゆかりのアイルランド人作家、ドイツ人哲学者の接点もゼロではなかったのだ。

一九六八年秋、東洋哲学史の研究に専念していた年金生活者のカルシュ博士は教え子の招きで、二十一年ぶりに日本の土を踏んだ。メヒテルトさんとともに各地で大歓迎を受け、出雲大社では自らの天命について感謝の言葉を述べた。

晩年には「少年期、まだ見たことのない大山の夢を何度も見た。松江は私の故郷、自分の魂は日本人であり、日本そのものが運命だった。出雲大社で人生のすべてが整理できた」と回想していたという。金婚式を祝った翌年の七一年、博士はカッセルで世を去った。

カルシュ博士の日本滞在中、唯一の険と思えるのは戦争中、大使館付副武官としてナチス政権に仕えた部分だ。しかし、妻がユダヤ系であり、新聞報道でしか母国の状況を知り得なかった境遇をしんしゃくすれば、仕方なかったとも言えよう。終戦後の二年間、わずかな蓄えでしのいだ軽井沢の暮らしぶりも含め、私の「カルシュ先生」物語はまだまだ完成をみない。（わかまつ・ひでとし＝東京医科歯科大学教授）



昭和7年（1932年）、松江でマルクスについて講義するカルシュ先生